

立命館大学総合心理学部 サトウタツヤ

前口上

昨年、久々に『対人援助学マガジン』に寄稿した。コロナ後の文化心理学ネットワークの再始動の様子を記録したものである。そこで、雑誌が年 4 回刊行であったとしても、こちらは年に 1 回寄稿して、様子を記録しておけば便利だろうということに気づいた。

まず、春学期にはオールボー大学のカロリンこと Carolin Demuth 教授が立命館大学総合心理学部の客員教授として滞在し、半期 15 コマの授業を行った（6 月中旬からはオンライン形式）。ついで、9 月には筆者が立命館大学総合心理学部海外フィールドワークの引率をしてデンマーク・オールボー大学とコペンハーゲン大学などを訪問した。これは復活 3 回目である。10 月にはおなじみのヤーンこと Jaan Valsiner 教授（オールボー大学）が来日して総合心理学部での講義や日本質的心理学会でシンポジウム参加などを果たした。そして 12 月、筆者はオクラホマ大学・Chie Noyori-Corbett 准教授に招待されて防災に関するシンポジウムで挨拶を行ってきた。その前にフロリダ州に足を伸ばして学生達のインターンシップの見学を行った。年明けの、2025 年 1 月にはブリガムヤング大学のザックこと Zachery Beckstead 准教授に招待されて、アメリカ・ハワイ州の同大学を訪問し、将来の学生・教員交流プログラムを構築する足がかりを作った。文化心理学を中心にした海外交流が再開した年だったと言える。こうした記録を残しておくのはやはり『対人援助学マガジン』だと思い、卒業した身ではあるが、急遽、原稿を準備することにした。

目次

- 1 2024 年 4～6 月 カロリン in 立命館大学
 - 2 2024 年 5 月 国際対話的自己学会@エストニア
 - 3 2024 年 9 月 海外フィールドスタディ in デンマーク
 - 4 2024 年 10 月 ヤーン in 立命館大学+日本質的心理学会@成城大学
 - 5 2023 年 12 月 サトタツ in フロリダ+オクラホマ
 - 6 2024 年 1 月 サトタツ in ハワイ・ブリガムヤング大学
- 付録 その他の活動メモ

1 カロリン in 立命館大学

オールボー大学心理・コミュニケーション学部と立命館大学総合心理学部は相互協力の覚え書きを締結しており、双方の学生や教員が行き来する体制を作りつつある。その流れに乗って、24 年度はカロリンこと Carolin Demuth 教授が日本に滞在し半期の間、英語で文化心理学について講義（総合心理学特殊講義Ⅲ）をしてくれた。ちなみにオールボー大学は、PBL を実践する大学として 1974 年に創設され、世界トップレベルの大学である（世界ランキング 201-250 位）。オールボー大学の PBL は全学部で実行されていて、オルボーモデルと呼ばれている。

シラバスの「授業の概要と方法」は以下の通りであった。

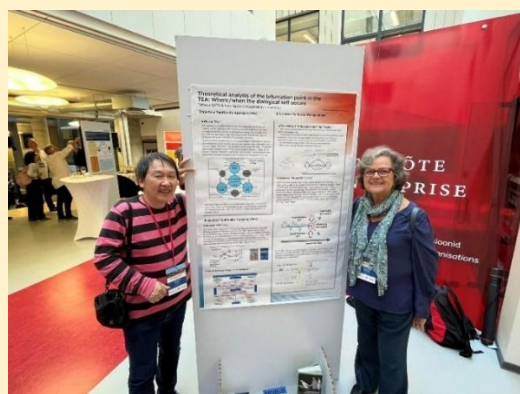
This course is based on face-to-face classes and be comprised of lecture and group discussions. The course will

give an introduction to Cultural Psychology with a focus on culture and human development and the dialogical interplay of self, culture and meaning-making practices. We will cover various traditions of Cultural Psychology, such as Narrative and Discursive Psychology, Positioning Theory, Language Socialization, Psychological Anthropology, and Dialogicality. We will discuss theoretical as well as empirical work and also present qualitative research approaches used in these traditions. Students will be given the possibility to apply these theoretical and methodological approaches to concrete material and within the context of Japanese society. The overall aim is to gain a better understanding of the cultural nature of the human mind and the role of language and social interaction in this.



2 2024 年 5 月 国際対話的自己学会@エストニア

コロナ禍で様々な国際学会も大きな影響をうけた。今年度は久々に国際対話的自己学会が対面で行われた。実行委員長はカロリンこと Katrin Kullasepp。現在、タリン大学准教授である。



エストニアのお寿司



3 海外フィールドスタディ in デンマーク

2023 年度から 9 月に行うことに海外フィールドスタディ、2024 年度も開催の運びとなった。オールボー大学の第一週の授業にあわせるため、23 年度と同じようなプログラムとなった。

表 2023 年度海外フィールドスタディ（デンマーク）日程表

9/09（月）	オールボー大学 文化心理学セミナー講義
9/10（火）	オールボー大学 文化心理学講義、街アート見学、コンピテンシー講義
9/11（水）	コペンハーゲンに移動。国民学校訪問
9/12（木）	コペンハーゲン大学 講義参加 エクスカーション（人魚姫）

以下、それぞれの日の活動報告である。

9/09（月） オールボー大学

10:15～

立命館大学の客員教授を務めてくれたカロリンによる講義。終了後の昼食は大学で（外だと物価が高い、という理由もある）。



ブレイディこと Brady Wagoner 教授による文化心理学の講義（社会的表象）に参加。RU と AU の学生の交流。自分の好きな物(大事な物)を用意してきて見せあって議論。昼食後街歩き。



9/10（火）

午前中は、サラ先生こと Sarah Awad 准教授のアート系の講義に参加した。午後から見学するウォールアートについての解説もあった（はず）。午後はオールボーの街歩き。サラの案内で街中の様々なアートを体験する。Sense of Wonder（オドロキの感覚）をもたらすのがウォールアート。



午後は丘の上にあるメインキャンパスへ

これもおなじみとなった Thomas Ryberg 教授と Jesper Vestergaard 教授にヤスパー先生の講義内容はアントレプレナー・コンピテンスでした。講義もさることながらブレイク用に用意してくれたお菓子と飲み物が豪華で

した。毎年、ありがとう！



9/11 (水)

オールボーからコペンハーゲンに移動。そして、昨年からお世話になっているデンマーク北端にある国際国民学校 (International Peoples College) を訪問。



9/12 (木)

コペンハーゲン大学の講義に参加。ブレイディが行う講義に参加させてもらった。



3 2024 年 10 月 ヤーン in 立命館大学+日本質的心理学会@成城大学

今回は珍しく？私自身が JR 茨木駅まで迎えに行った。思い起こせば、2004 年 1 月も、ヤーンを迎えに関西

国際空港までで向いたのあった。



ヤーンはまず、10月18日に訪問教授として総合心理学部の授業を行った。今回のタイトルは「Psychology within Society」というものであり、日本の弁当（Lunch boxあるいはBento box）を題材に、食べることは単に生物学的欲求を満足させるものではなく、社会が差配する文化的な枠組みの中で食という行為が成り立っているという話からスタートした。



次いで、10月19・20日の日本質的心理学会第20回大会に参加した。ヤーンは第1回大会（2004）で講演をして以来たびたび日本に来て日本質的心理学会に参加しているが、今回は、『文化心理学入門（An Invitation to Cultural Psychology）』の翻訳出版記念も兼ねていた。





4 2023 年 12 月 サトタツ in フロリダ+オクラホマ

オクラホマ大学で行われるシンポジウムに参加することになった（ご招待）。二泊三日でアメリカ往復はツライと思っていたので、学生の留学プログラムの視察を行うことにした。これはかねてより考えていたことで、カナダのものかフロリダのものか、候補があったのだが、地理的隣接性を重視してフロリダを経由してからオクラホマ入りすることにした。

2024 年 12 月 4 日 Valencia College バレンシアカレッジ（フロリダ州オーランド）訪問

場所：Disney 寮（Flamingo Crossing Village）

概要。今期のインターンプログラムは日本の各大学から 40 人ほど（うち、12, 3 人が立命館大学）が滞在。ディズニー関連の仕事を 5 日して（インターンシップ）、給料をもらいながら、2 日は授業を受ける。手取りは（円安もあって）雑費を引かれても 20 万円くらいになるそう。仕事は完全にバラバラに配属される（前半後半で 2 つの仕事を経験できる）ため、職場で日本人と一緒にすることはほぼない。授業は日本人 20 名、外国人 5, 6 名で 1 つの組を作っているの、休憩時間は日本語が飛び交う。寮はディズニーインターン用の寮。4 人部屋で、様々なインターンプログラムの人が色々なタイミングで入れ替わる。結果としていろんな国の人や日本の他大学の人もルームメートになれる。

感想。私が来たのが開始から 4 ヶ月目くらいだったので、皆それなりに安定して生活できていた。このプログラムはかなり良いのではないかな。学生の立場から見たときに、やらない理由がない。

前夜祭（バ先訪問）ゼミ生 RiN が働いていたのはホテル内 Beaches and Creams Soda Shop。彼女は主としてアイスクリームの盛り付けを担当。ギネスフロート（ギネスビールにアイスクリームを盛り付けた飲み物）を作っているので注文してみた。。。まずくはないが、料理の時に飲むものではなかった。。。。



当日 ゼミ生 RiN に寮の案内をしてもらう。このインターンのために400人規模の寮が用意されている。



プログラムを回しているカーラさん、リーダーシップの授業担当のウェス先生とコミュニティセンターという建物の中で懇談。



時給15ドルで週5日働き、残りの2日でマネジメント関係の授業を2つ受けるというのがこのプログラム。最初の1, 2ヶ月はツライ思いをしている人もいるようだが、そのうち慣れる。寮ではいろいろな行事がある。プログラムは春始まりと秋始まりがあるが、後者に参加すると、ハロウィーン、サンクスギビング、クリスマス、を経験できるので、そのほうが楽しいはずだ。

日本の学生、中でも立命館大学の学生は、よく頑張っているし優秀だ

授業を1日にまとめる(3時間・休憩・3時間)ことも可能だが、それも学生にとって大変なので、2日に散らす方がいいという意見もある。コロナ中はこのプログラムを3年間クローズしてたが今は大丈夫。

授業は2組にわかれて受ける。水曜にリーダーシップ、木曜にビジネスマネジメントという組と水、曜にビジネスマネジメント、木曜にリーダーシップという組がある。

リーダーシップの授業参観（クラスの最終日なのでプレゼン）



夜は、（学生が牛角で日本食を食べたいというので）牛角に（日本食はどちらかというと高級で普段は食べられないとのこと）。ゼミ生 RiN が立命館大学生全員に声をかけたらほぼ全員が来た。



せっかくなので、食べながら1人1人の話を聞きました。

聞き取り 匿名化

A. 3回生 めっちゃ楽しい ご飯がおいしいし何も困ってない。インスタント味噌汁を持ってきたけどたべてない！ 苦労したことは、英語に少しとまどったこと。お客さんに聞き直すのが気まずい。

B. 2回生 はじめの書類手続が面倒だった。日常生活の買い物のやり方に慣れるのが大変だった。いまは友だちもいるし大丈夫。ルームメイトがサウスカロライナの人で、実家につれてってもらって狩りを経験できた。

C. 3回生 楽しい。仕事のときコミュニケーションが大変。3ヶ月くらいたってお客さんの言うことがわかってきた。

D. 3回生 疲れて泣く時がある。インドアタイプなので、接客を毎日精一杯頑張ってるけどうまくいかない。マジックキングダムチケット売り場。毎日泣いていたときもある。

E. 3回生 エブコット（エリアの名前）にいたけど、そのときは仕事のシフトが朝番、夕番と変化して大変だった。いまはリゾートのクイックサービスにいるので仕事が一定してリズムが安定してる。順調です。ルームメイトと仲良くなってきた。家事といろんな課題で就活時間がない。。友だちが支え。日本の友だちとも連絡している。お土産を選んでいて、それを渡した時の友だちの顔を思い描いてる。就活しようと思ってスーツ持ってきた

けど時差の関係で難しい。休学しようかな。

F.3 回生 良い感じ。悪いことが無い。職場が屋外で寒い。出勤時間が遅いので帰りが遅い。特に悩みはない！

G.2 回生 楽しい。アトラクション（メリーゴーラウンドを回す仕事を任された）は大変だった。同僚は優しくかったけど。。。安全第一だったから気が張っていた。今はおみやげやさん。めちゃ楽。気楽でいい。

H.2 回生 楽しんでます。毎日。お土産屋さん→レストラン。慣れるまでの予定管理は大変だった。

I.2 回生 最高です。困ったことはない。週5仕事、週2授業。休みがほしい。中学校のときにアメリカに来たことがあったのもう一度きたいと思ったので応募した。高校の時はコロナでダメだったから。

J.2 回生 頑張ってる。仕事。お土産→ショーの運営。仕事を英語で覚えるのが大変。ショーの観客7000人をディレクションするのが大変。クレーム処理が大変。大変なことが多いけど学びも多い。

K.2 回生 楽しんでる。楽しいことしか無い。辛いことはない。たまに英語を聞き取れないけど。。。

L.2 回生 まあまあ楽しい 土産屋→車椅子貸し出ししてたときは、皆さんに対してあたりさわりなく料金を説明していた。でも料金のことでクレームがきたりしたし、車椅子の方から駐車場から遠いというクレームもあったので大変だった。アメリカ人の友だちが自我が強くて困る。私は何も言えないでいると、静かな奴に見なされてしまうのが困る。

M.2 回生 フィリピン出身。13才のときに日本にきた。ここは全然楽しい。毎日充実してる。仕事をやりながら遊びにいったり、食事を作ったり。勉強もがんばってる。フード予約とったり（接客）→食べ物つくって運ぶ。

N.3 回生 調子いい。ベッドが柔らかすぎて寝にくいのでリビングのソファで寝てる。マジックキングダム土産店（パークに来るいろんな人）→レストラン（レストランは宿泊客が多いので裕福）でアイスクリームの盛り付け。マジックキングダムの地下通路にウォルトディズニーの格言が並んでるのが凄かった。授業2日、仕事5日、というのがツライので改善してほしい。最初の1ヶ月は時間がたつのが遅かった。私は留学に行きたかったし人と違うことをしたかったので選んだ。時差の関係で就活が難しい（冬の時差14時間）。

2024年12月6日に、在ヒューストン・日本領事館の企画で日米両国の研究者が研究交流を行うシンポジウム「**Innovations and Best Practices in Disaster Prevention and Preparedness: Japan and the United States**」が開催された。これは総合心理学部がMOU（覚え書き）を結び双方の学生が行き来する交歓事業を行っているオクラホマ大学社会福祉学部の Chie Noyori-Corbett 准教授が企画したもので、両大学の交流をさらに展開しようという意図をもって行われたものです。私は来賓として、閉会挨拶を述べる役を仰せつかりました。



イベントの URL

<https://ou.edu/cas/socialwork/news-and-events/events>

在ヒューストン日本国総領事館

https://www.houston.us.emb-japan.go.jp/itpr_ja/11_000001_00703.html



5 2024 年 1 月 サトタツ in ハワイ・ブリガムヤング大学

1 月 20 日 日本時間の夜に出発して、アメリカの同日午前中に到着するという不思議。さっそくザックと合流し、さらに『Culture and Psychology』をヤーンから引き継いだケビンも合流してポリネシアンカルチャーセンターを訪問。



1 月 20 日

ブリガムヤング大学ハワイ校 (BYUH) 学部長と懇談 交流企画打ち合わせ

ブリガムヤング大学は末日聖徒イエス・キリスト教会（モルモン教として知られる）が運営する私立大学。本部はアメリカ合衆国のユタ州プロボにある。ブリガム・ヤングは創設者の名前。1903 年に大学としての認可を受けた。プロボ校のほかにアイダホ校とハワイ校がある。



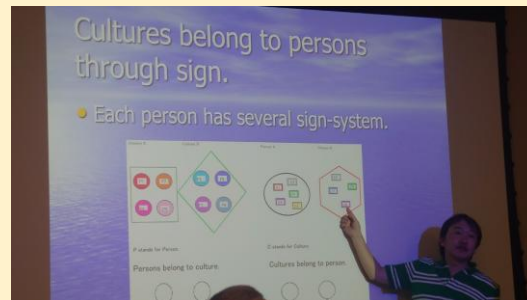
ベンことジョーダン教授 (Benjamin R. Jordan ; 科学部・学部長) との会談で、お互いの学生が行き来して交流するようなショートトリップ型の交流事業を立ち上げることが現実的ではないか、ということになった。立命館大学の MOU の雛形を渡して今後のプロセスについての検討を依頼した。

ジョーダン教授は地理学 (火山学) 者であり、桜島や九州の南にある硫黄島を訪問したとのこと。また日本に来たいとのことであった。ただし、彼の任期は 7 月まで。その後はアイダホ校に戻るため、それ以前に来学してもらうことができると交渉がスムーズに進むはずである。

学部生相手に 文化心理学の講演
記号論的文化心理学から見た文化差

主催者ザックのほか、教員 4 名、学生約 20 名が参加。

文化を固定化したものとして捉えて差異を強調する比較文化心理学ではなく、「文化が人に属する」と考える記号論的文化心理学および TEA（複線径路等至性アプローチ）についての講演。来場者の未来展望とその複線径路を描き、他者に説明して交流するワークショップを実施。多様なコミュニケーションを創発した。



★RU 学生の感想

A さん

今回、初めてハワイ、特に BYUH を訪れる機会を得て、実際にその地で様々な経験をすることができました。授業や活動を通じて現地の学生と直接交流し、彼らがそれぞれ明確な目標に向かって努力している姿に触れることができました。この経験を通じて、自分自身も何か新しい挑戦をしてみたいという前向きな気持ちを持つことができました。

現地では思わぬつながりにも驚きました。高校の友達と BYUH の日本人学生がつながっていることを知り、「世間は狭い」という感覚を異国の地でも実感しました。また、そもそも日本人学生との出会いも予想していなかった出来事でした。彼女たちの積極性や挑戦する姿勢に刺激を受け、英語を学ぶ意欲や行動力の大切さを改めて実感しました。

短い滞在期間ではありましたが、ハワイの自然、美しい景色、そして食文化（ロコモコやポキ）や音楽といった日本とは異なる魅力に触れることができました。このような体験を通じて、ハワイの素晴らしさを肌で感じることができ、「来て良かった」と心から思いました。

ハワイを訪れることで得られる学びや刺激は、現地でしか味わえない特別なものだと思います。だからこそ、これから多くの学生がハワイを訪れ、異文化に触れ、学びを深めていってほしいと願っています。そして、ハワイへの憧れを持つ学生が多いからこそ、交換留学プログラムの実現を心から期待しています。

最後に、無事に帰国できたのは、ザックさんやサトウ先生、林先生、春日先生をはじめとするサポートのおかげです。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

B さん

今回ハワイに行き、BYUH や文化センターに訪れたことによって、モルモン教やハワイの文化を感じることができました。BYUH に訪れた際、友好的に歓迎してくださり、大学の雰囲気は活発な印象を受けました。授業開始時にはモルモン教のお祈りが始まり、少し驚きました。しかし日本でも授業の号令はあることを考えると、宗教という側面もあるとは思いますが、習慣である側面もあるのだと感じられました。授業で話した学生の印象は、友好的でとても親切な印象でした。授業終わりに日本人の学生の方と夜ご飯を食べた際、ハワイでの暮らしや観光地を教えていただき、帰りは駐車場まで案内してくれました。モルモン教を両親が信仰していることから、学費が安くなることから自分もこの大学に来たという話をしてくださったことが印象に残っています。宗教信仰することを隠す日本と、宗教信仰が当たり前であることからあっけらかんと話すハワイでのギャップがとても興味深かったです。また、BYUH では、文化センターなどで働きながら学費や生活費を稼ぐことができる制度がある話を聞きました。「学費や生活費に困らないお給料をもらえる契約だから、両親に頼らずに学ぶことができます」と教えてもらいました。また、日本人学生だからこそ感じる日本とのギャップでは、日本では高校卒業後、大学に進学することが当たり前の風潮があるが、アメリカでは高校卒業後、自分の進みたい道が決まってから大学に進学する人が多いと聞きました。

今回少ない時間でしたが、BYUH の学生と一緒に過ごすことによって、自然と文化体験ができたと思います。文化は学ぶだけではなく、実際に訪れて体験することで、自分が持っていたその文化に対する先入観が実際とは異なることに気づくことができると考えています。また、観光することで、poki 井などから日本との関わりや、ハワイの歴史を感じることができました。

最後になりましたが、今回プレゼンの機会を与えてくださったサトウ先生、4 日間運転してくださった林先生、春日先生、もてなしてくださったザック先生とケビン先生、BYUH の学生の方々に感謝申し上げます。ザック先生を始めとする BYUH の方々から頂いたおもてなしを、日本に来た際には返せることを楽しみにしております。本当にありがとうございました。

BYUH 学生の感想

C さん

During the presentation, Dr. Sato discussed semiotic cultural psychology, specifically the Japanese culture of mask-wearing. He discussed that wearing a mask in Japan symbolizes cleanliness. Also, showing teeth when smiling is rude in their culture. He also added that hiding your eye means you are bad person and showing teeth is impolite. He taught about the three layers, which are the value, sign, and action. A sign like sneezing in Japan means you are sick, while if you sneeze in America, people around you will say, " Bless you." What I think of his presentation was very fun and engaging. I noticed how he let us rate if Batman and Bane are extremely bad or extremely good. I was surprised to see people who grew up in Japanese culture view Batman as a bad figure because he hides his eyes and shows his teeth, which is very opposite to Americans. They see Bane as a good person because of his round eyes. Learning about different cultures and sign systems and how we use them helps us to understand more of their mind and behavior.

D さん

Dr. Sato's lecture on cultural differences between Japan and the U.S. was really thought-provoking. He used the example of masks to explain how cultural meanings can shift—while in Japan, masks symbolize cleanliness and even

attractiveness, in the U.S., they're primarily associated with medical use. This helped me better understand how symbols and actions can hold different meanings in different cultural contexts. He also introduced the concept of multi-trajectory future planning, which I found fascinating. The idea that we can have a goal with multiple alternative paths each shaped by different forces, really resonated with me. It's a helpful way to think about the future because it acknowledges the uncertainty we face while still offering hope through supporting forces. I think it's a great framework for navigating both personal and professional growth. Overall, his ideas about cultural differences and future planning were eye-opening. They made me reflect on how I approach goals and challenges, and I feel more equipped to navigate multiple possibilities in my life.

E さん

JAPANESE STUDENT: I really enjoyed his thoughts, especially the concept of "semiotic culture," which means culture within people, not people within the culture. I thought this was super unique because most of us think we live in culture, but in reality, all Japanese people are different, and that too is culture. I believe this reflects the weight that we create culture within ourselves, while the majority's thoughts have led us to believe that culture belongs to a country. I also love the way they created a plan for our future. It's helpful to plan the details for our future and focus on what we need in life. They also gave us the opposing perspective, which helps us understand the right way better. I enjoyed these labs; thank you for the opportunity! I also made new friends! :)

同行者

林勇吾教授、春日彩花助教、三日月礼乃、岡本真侑（総合心理学部生）

付録（以下は、文化心理学と関係するようないような活動の記録です。

4 月 24 日 慶應義塾大学・井庭ゼミサトゼミ交流会



5 月 5 日 教え子の結婚式で韓国に！（他の元ゼミ生が迎えにきてくれた）

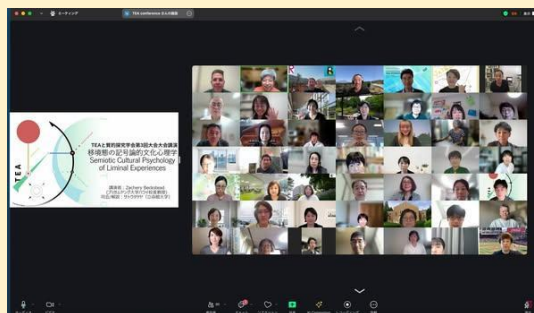


5月25・26日 第3回 TEA と質的探究学会@武蔵野美術大学

TEA と質的探究学会 <https://jatq.jp/> 会員が 300 人をこえたらしい。。

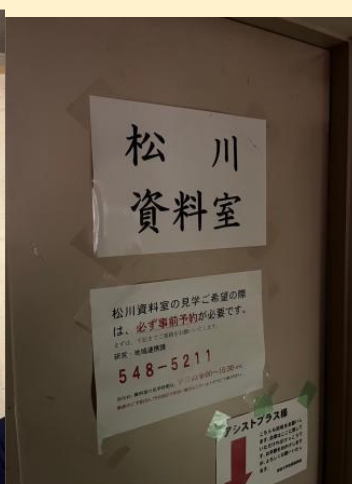
学会誌もあります。 <https://jatq.jp/journal.html>

準備委員長の荒川くんと久々の白井さん



8/29-31 サトゼミ福島訪問

17 期生、ソウル大学で科学社会学の大学院で学んでいるオ・ウンテク君、M2 の 18 期生さきていん、学部 3 回生 22 期生のザイとうえさま、が福島に行ってきました。福島県立医科大学ではサトゼミの 3 期生日高、5 期生春日の他の皆さん、楡葉町のならば未来では校友の皆さんにお世話になりました。





9月19日 隠岐高校を訪問



11月6日 APU を訪問



11月10日 福島県・浪江町と双葉町を訪問（教養ゼミナール）



11月14日 北海道訪問 誓報寺・田中学園立命館慶祥小学校



誓報寺では総合心理学部設立にあたり寄付をいただいた佐藤真由美様に感謝の意を伝えました。

12月21日 福島県・浪江町を訪問（教養ゼミナール）

みちの駅なみえで浪江町の観光資源認知度に関するアンケート調査を実施。久々に菅野さん！



2025年1月18日 TraMIHS (The 1st Transnational Meeting on Innovative Human Sciences)

TraMIHS（とらみす）、やって👍

この企画はもともと華ちゃん（国際担当副学部長・鈴木華子准教授）がたてたもので、こういう形になったのは大変うれしい。

企画運営は実行委員会の皆さんがやっていただいている、私は事情で昨日も参加できなかったけど、知の必須通過点（Obligatory Passage point）づくりもうまくいきそう。

海外との協定が有名無実になることが多いなか、協定校の皆さんに声をかけたら沢山きてくれました。

<https://www.ritsumeai.ac.jp/gshs/info/detail/?id=147>

フランス・トゥール大学との交流を学生・教員に広げるための MTG も行いました。



2月1日隠岐 第3回メタバース研究会@隠岐島



ハイブリッドの研究かいだからこそ、島でやる、という心意気！今年はメタバースに巻き込まれた元年でした。いろいろと面白いことができるかもしれません。

ラヂオで心理学論の日だったので、隠岐から参加。といっても分からないので、背景を隠岐っぽい写真にしてみました。誰が聞いているの？と思うけど「最近は週末に資格の勉強をしており、なかなかリアルタイムでは視聴できませんが、いつも楽しみにしております。どうか月に一度楽しく続けていただきたいと思います」と書いて書き込みがあったりするので、誰かの楽しみにはなっているようです。

<https://www.youtube.com/watch?v=pqY2ht7zfGU>

2月26-28日 執筆合宿@帯広

帯広畜産大学（総合研究棟2階）において、渡邊芳之教授、尾見康博（山梨大学教授）とともに有斐閣から出版予定の『心理学研究法 入門』の出版会議および執筆を行った。また、日本質的心理学会『20年史』の執筆構想会議を行った。三教授の会合というそれっぽいが、実態は・・・（笑）。



3月3日 いのちのつどい

元ゼミ生社会人一期生の珠郷（みさと）がプレゼンに来ていた。それとは別になるが、面白い出会いがあった。ゴスペラーズの北山さん。このことはまたいずれしっかり書きたい。



まとめにかえて

以上、2025 年度における文化心理学の仲間達との交流を中心に様々な活動を振り返ってみた。私が TEA（複線径路等至性アプローチ）を開発する途上で出会った当時の大学院生たちが今では大学の教員になって立命館大学の学生たちと交流してくれているということに、大きな喜びを感じている。

参考にこれまで対人援助学マガジンで紡いできた文化心理学的交流について振り返っておく。

対人援助学マガジンの関連サイト

2012 年 1 月イタリア、3 月ブラジル <http://www.humanservices.jp/magazine/vol8/16.pdf>

2013 年 3 月イタリア、デンマーク、5 月イギリス <http://www.humanservices.jp/magazine/vol13/17.pdf>

2014 年 3 月ブラジル、4 月デンマーク、8 月オランダ、デンマーク

<http://humanservices.jp/magazine/vol18/17.pdf>

2016 年 7 月横浜 ICP、9 月ポーランド、10 月イタリア、11 月ノルウェー

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol28/16.pdf>

Jaan Valsiner 先生、2018 年 5 月の滞在記

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol33/16.pdf>

ヤーンの古希を言祝ぐ

日本ならびに立命館大学における TEM とヤーンのネットワークの拡大(1) 2008 年まで

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol43/15.pdf>

日本ならびに立命館大学における TEM とヤーンのネットワークの拡大(2) 2009 年から

帰って来た__対人援助学の縦横無尽 (1) ; 2024 年度の文化心理学ネットワーク

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol56/11.pdf>